

タイの友人たち

平尾 光司

今回の社研合宿の楽しみは10年ぶりにタイを訪問して同国の経済・産業の最近の発展の調査に加えて個人的には永年のタイの友人たちとの再会であった。とりわけ、ヴィラポン君(元タイ副首相、蔵相)、プリディアトーン君(元タイ中銀総裁、前蔵相)の二人の親友はぜひ会いたいと願っていた。幸いバンコックで二人に会うことができ、タイとの縁をあらためて強く感じた。

彼らとの縁は40年以上も前までさかのぼる。1966年にフィラデルフィアにあるペンシルヴァニア大学にフルブライト留学生として産業組織論の研究の機会に恵まれた。

当時、アメリカの経済学関係の大学院留学生でフルブライト、フォード財団、ロックフェラー財団などの公的奨学資金の支給をうける留学生はコロラド大学のEconomic Instituteの夏季オリエンテーション・プログラムに参加するという有難い“義務”があった。

日本からは榊原英資さんも一緒にあった。当時はアメリカが輝いていた時代であり、我々は始めてアメリカの土を踏み、これからのアメリカン・ライフへの期待と高揚感に満ちていた。ロッキー山脈の麓の大学町ボルダーにある美しいスパニッシュ・コロニアル風のキャンパスは、そのように昂ぶる我々の気持ちを受け入れてくれた。英語と経済学のオリエンテーション・プログラムは充実しており、コロラドの抜けるような青空の下での一ヶ月の間に多くの国の留学生と友情を深めた。

その中で、特にタイからの留学生の一人と仲良くなった。それが生涯の友人となるヴィラポン・ラマンクラ君であった。そして彼が私と同じペンシルヴァニア大学院経済学科に留学することを知り、またお互いに貧乏学生であることも分かり、家賃節約のため、フィラデルフィアでは二人でアパートを借りてルームメートになる約束をした。

楽しかったオリエンテーションが終わり、二人でフィラデルフィアに向かった。ホテルの予約無しで心配であったが、ヴィラポン君は「タイ・ホテル」があるから心配するなという。空港からタクシーで大学キャンパス近くのアパートに着くと、そこが「タイ・ホテル」であった。そこには、部屋が四つほどありタイの留学生が数名で共同生活していた。旅行に出かけて不在の学生のベッドを宛てがわれて、アパートが決まるまで泊めてもらうことになった。その時からフィラデルフィアでのタイ留学生のコミュニティにどっぷり漬かることになった。タイ文化へのexposureの初体験であった。アパートでは三人のタイ学生が共同生活しており、パタナ君、チラワート君、シン君であった。パタナ君はタイ内務省から地方行政、チラワート君はチュラロンコン大学から医学、シン君は父親がタイ最大の銀行バンコックバンクの創立者の一人であり、

私費留学生で金融の勉強にきていることが分かった。後日談になるがこの三人はそれぞれ帰国後、タイで活躍することになる。パタナ君は内務省官僚としていくつかの州の知事になり、チラワート君はチュランコン大学の医学部教授となった。シン君は大蔵省に入り昇進して、理財局長のあとバンコック証券取引所理事長となり、現在はタイ最大の製紙会社サイアム・ペーパーの社長である。この「タイ・ホテル」に厄介になっている間に、ここがフィラデルフィアのタイ留学生のたまり場であることが分かってきた。大勢の男女学生が入れ替わり立ち代わり出入りして、日本人よりオクターブの高い声で賑やかなおしゃべりをしたり、食事をしたりして時間をすごしていく。私はヴィラボン君のルームメートになるということで、そのタイ留学生の仲間に入れてもらった。アパートにはタイ独特の臭いが染み付いていた。最初は分からなかったが、それはタイの魚醤油ナンブラーや様々な香辛料、ココナツオイルの混じりあった「タイの匂い」であることを後に知ることになった。彼らの料理するタイ式ラーメン、カレーはじめタイ料理には馴染めず辟易した。特にタイの食事に欠かせないパクチー（香菜）はどくだみのような強烈な匂いがして最初は強い抵抗感があったが、空腹には耐えられず食べているうちに深い味わいを感じるようになり、今日までの、タイ料理への愛着の原点となり、パクチーは欠かせない。

そのうち学生街の中にアパートも見つかり、ヴィラボン君との共同生活が始まった。食事は交代当番としたため、私の作る味噌汁、彼のタイカレーなど、タイ、和食の匂いにアパートのほかの住人から抗議があり、家主から追い出されかけたこともあった。

夕食のあとお互いに経済学以外に生い立ち、家族のこと、故郷のことを語らった。その身の上話からヴィラボン君は貧しいバンコックの警察官の長男で母親はミャンマー系の少数民族であること、五人兄弟の長男であることなどを知った。ロックフェラーの奨学金の中からタイの家族に毎月送金して兄弟の学費援助をしていた。ロックフェラー奨学金は我々のフルブライト奨学金に比較すれば恵まれていたが、家族送金のためにつつましい生活をしており、そのため貧乏留学生の私には有難いルームメートであった。

タイの留学生は華僑系の子弟が多い中で、彼は母親の血筋か色が黒く痩せていた。そこから綽名は「クローン」タイ語でやせっぽち、であった。クローンは日本では黒に通じるといったら、皆がタイ・日本語の組み合わせで完璧な綽名になると喜んでいっそう綽名が広がった。

タイの名門大学のチュラロンコン大学法学部が経済学部を創設することになったため首席卒業生の彼が選ばれてロックフェラー奨学資金でペンシルヴェニア大学に派遣された。大正時代に東大が経済学部を設置することになり、法学部から大内兵衛が選ばれてドイツに留学して経済学を学んだ故事を彼に話して激励した。彼は当時の軍部政権の独裁・腐敗に対する厳しい批判をしていたが、同時にタイのプミポン国王に対する深い畏敬の念をもっていた。日本とタイ

の近代化の異同についても議論した。彼は日本の近代化における企業家に興味を持ち、紹介した渋沢栄一に関心をもち、その後も渋沢栄一の自伝「雨夜譚」の英訳本を読み続けていた。

我々のアパートは東南アジアの留学生のたまり場になり、インド、パキスタン、タイ、インドネシア、マレーシアなどの留学生が集まり、勉強だけでなく、週末には当時燃え盛っていたヴェトナム戦争の議論や、自分の国の経済・政治を紹介したりして夜更かしをした。また、彼らの持ち寄るそれぞれの国のカレー料理のお陰で東南アジアのカレー料理の奥深さを味わった。そのため、日本からの留学生のサークルにはあまり深入りしなかった。

法学部出身のヴィラポン君は経済学の初歩から勉強、行列、微積分など数学で苦労していた。最初は私が教えていたが、最初のセミスターで追いついて、こちらがエコノメトリックスや微分方程式など、数学も教えてもらうことになった。

一年の留学が終わって帰国するころになった。ヴィラポン君は博士号取得が留学とロックフェラー奨学金の条件でありまだ何年要するか分からない状況であった。

私の帰国後のルームメートになると紹介されたのが、初々しい学生がプリディアトーン君であった。タイの王族につながるという彼は貴族の雰囲気があった。その時には三十年後ヴィラポン君が経済担当副総理、プリディアトーン君が中銀総裁としてタイ経済危機を乗り切ることになるとは夢想もしなかったことである。

ヴィラポン君はその後ローレンス・クライン教授の指導の下でタイ国の最初のマクロ経済モデルを作成して、博士号も取得してチュラロンコン大学経済学部長に就任した。帰国途上四年ぶりに再会し、私の東京の社宅に泊まっていった。その後も日本出張の折には鎌倉の我家にたびたび泊まってくれ、こちらがバンコックに出張するたびに奥さんと歓待してくれ家族ぐるみの付き合いとなった。

彼はチュラロンコン大学の教授としてタイ経済界、経済官僚を多数養成した。今回、社研の勉強会でタイ経済について報告してくれたタイ大使館のスプラディ・ケッダさんもこの当時の教え子である。ケッダさんによれば厳しい学生指導で学生からは敬遠されていたらしい。

その後は総理の経済顧問を務め、タイ経済の高成長への離陸の契機となった1983年のバーツ切り下げを主導した。その後、大蔵大臣、国王経済顧問などタイの経済政策の指導者となった。タイの大内兵衛ではなく大来佐武郎になったように見えた。タイ経済への貢献と清廉潔白の人柄からプミポン国王の信任が篤く、日本の勲一等にあたる白象勲章を受勲している。

私は長銀調査部でのタイ経済調査、国際金融業務担当の時にはタイへのシンジケート・ローン、東京市場での円建て債などの資金調達で邦銀間の競争の中で心強いアドバイスをもらった。

その後、民間企業 Agro Thai 社やタイ航空の会長を務めたりしていた。しかし、1997 年秋の

タイ経済危機に際してプミポン国王の命によって経済担当副総理に就任してIMFとの交渉の陣頭に立った。タイをIMF管理下にならないように交渉して、同時に破綻銀行処理のための破産法などの制度改革も断行した。IMFとの交渉は思い出したくも無い屈辱的なものであり、今も怒りを抑えられないと今回バンコックで会ったとき打ち明けられた。

通貨危機の中でタイは為替政策でドル・ペッグ政策を放棄して通貨バスケットのフロート政策に転換した。そのころ東京に来た彼に「バスケットのに入れている通貨とその比重はどうなっているか」と尋ねたことがある。彼はニヤリと笑って「コージ、それはタイの最高の国家機密でいくら親友でも答えられないよ。しかし、ヒントは上げる。4元一次方程式をパーツ・レートの4日間の変動で解を求めれば推計できるよ。」私はまだその方程式を解いたことがない。

彼はタイの危機管理から脱した副総理を退任する時に、当時タイ輸出入銀行総裁であったプリディアトーン君を中銀総裁に推薦して後事を託した。

プリディアトーン君は金融政策を巧みに運営してタイ経済を再成長の軌道に乗せてきた。そして昨年のタクシン政権に対してクーデターを起こした軍事政権の大蔵大臣に就任したが、二ヶ月で軍事政権と対立して退任してしまった。今回バンコックで聞いた噂では、プミポン国王が軍事政権の前途を懸念して貴重な人材であるプリディアトーン君が巻き込まれないようにとの国王の意向があったようである。彼に真偽を確かめたが笑って答えなかった。

今回の訪問でヴィラポン、プリディアトーン君が食事に招待してくれたが、二人とも流動化したタイの政治から距離を置いていた。ヴィラポン君は民間企業の経営に、プリディアトーン君はチェンナイに建てたリゾートホテルを奥さんと共同経営している。

この原稿執筆時のタイの政治情勢はまた流動化してきた。タイの友人たちがどのような気持ちでいるか、気がかりなこのごろであるが、危機になれば彼等の出番があり、危機の処理に当たることと期待している。